

もくじ

伊興・実相院の横沼観音堂碑 … P1 はい、文化財係です② 新井学校 … P2  
あだち民具図典⑦ 皿籠・ハス籠 … P3

# 足立史談

第641号

2021年7月15日  
足立区立郷土博物館内  
足立史談編集局  
〒120-0001  
東京都足立区大谷田5-20-1  
TEL 03-3620-9393  
FAX 03-5697-6562



明治時代に活躍した哲学者、大内青巒（おおうち・せいらん。1845～1918）が撰文した石碑が、伊興の実相院にあります。

山門に入つてすぐ左側にある「横沼観音堂碑」と題された壮観な石碑で、碑高190cm、幅141cmという大きさで、明治28（1895）年の建立です。

## 伊興・実相院の横沼観音堂碑

### —明治の大哲学者 大内青巒の碑—

多田文夫

明治37（1904）年の銅版画「寶光山横沼寺實相院之景」 当館蔵



東 京 府 南 足 立 郡 伊 興 村  
新 義 真 言 宗 寶 光 山  
寶 光 山 横 沼 寺 實 相 院 之 景

本尊 聖観世音菩薩行基菩薩ノ尊像  
往昔本村ハ沮清ノ地ニシテ今尚  
一帯ノ地名ヲ土俗横沼ト称ス天  
平年中行基菩薩諸國弘法ノ砌茲  
地ニ錫ヲ止メテ池中ニ吳木ヲ求  
メ自ラ大徳ノ尊像ヲ刻メテ一宇  
ヲ創立シ彼ノ尊像ヲ奉安セララル  
ニ於テ庶民菩薩ノ徳風偉大ナルニ  
順化シテ教法附近ニ蔓延セリ康平  
年間源頼義等安部貞任追討ノ朝命  
ヲ奉シテ當地ニ陣シ朝敵降服並ニ  
戰捷ヲ祈誓シ乱平定ノ後十有五町  
ノ地ヲ寄附シテ境内トス次テ  
武蔵守藤原成実モ亦巨額ノ洋  
資ヲ投シテ莊嚴ナル堂塔ヲ建  
立セラレテ后話者常ニ雲集シ

相宗將公ノ御寄附  
寛保四年二月紀伊宰  
西界曼荼羅 二幅  
寶物  
中興長盛法印ノ再建  
字ハ文永ノ末年當山  
ナリト云フ  
内ノ面目ヲ一新セ  
シ翌廿二年十一月  
廢切テ告ゲ大ニ境  
ヲ一ノ面ニテ  
リ、因ニ現今ノ堂  
中興長盛法印ノ再建  
ナリト云フ  
西界曼荼羅 二幅  
寛保四年二月紀伊宰  
相宗將公ノ御寄附

明治三十七年七月

### 1 大内青巒

碑の撰文者、仏教哲学者、大内青巒は、仙台藩士の子で、宮城県仙台出身の人で、宮城県から茨城県を経て水戸で出家して禅僧(曹洞宗)となりました(のちに還俗)。仏教哲学で活躍し、曹洞宗を開いた道元の正法眼蔵をベースに、教書『修証義』(1890年)など多くの著作を著しました。のちに第三代の東洋大学学長となります。

青巒の家は、周防(山口県)の戦国大名大内氏の一族とされ、のち伊達家に任えて仙台で家を継承したとの由緒があります。ちなみに、号の青巒(せいらん)は仙台城の別名「青葉城」を意味しているとのこと。

### 2 横沼観音堂碑

横沼観音堂碑は、現在、子育て観音として知られる「木造観世音菩薩立像」(東京都指定・有形文化財)と實相院の伝説と歴史を記し、明治21(1888)年に實相院(観音堂)の再建を記念して建立した経緯が記されています。なお横沼は伊興の地名で、寺号にもなっています。

■碑文の内容 記述は当時らしく漢文で記されており、前段には行基菩薩が水中から霊木を見出し、大悲観音(子育て観音)を彫ったこと、平安時代に源頼義・義家の戦勝祈願があり、武蔵国司、藤原成実がこの寺院を建立した

という伝説が記されています。行基伝説に源氏伝説を取り込みながら壮麗な漢文で記され、最後に實相院の名「實相」を取り込んだ漢詩で謳いあげています。

實相は相無く、自在王を觀ず。  
風華と雪月と、随所同場なり

(部分。漢文)

■銅版画 前掲の銅版画は、碑の建立から十年後に発行(審美館が製版したと記す)された案内です。当時の境内のようすが記されており、その中央に「観音再建記念碑」とあるのが、今回紹介した「横沼観音堂碑」です。紹介文はおおむね碑文を要約した内容となっています。

### 3 石碑が語る歴史と伝説

足立区の伝説や歴史を刻した石碑は江戸時代から交流があった文人や学者が名文を記した、名文の記念碑が多いのが特徴です。

江戸東京の文化を担った人々と交流していたことを物語る資料としても重要です。


石碑は比較的長期にわたって記録を残すことが可能ですが、東京の場合、関東大震災や空襲、さらに生活の変化から失われる場合がしばしばあります。この伊興、實相院の石碑は、文化人と交流して記録を残した足立の人々の様子を今に伝えています。

(郷土博物館 学芸員)

はい、文化財係です 29

## 新井学校

— 足立区初の公立小学校 —



今回は、足立区の教育史にとって重要な足立区初の公立小学校である新井学校についてご紹介します。新井学校があった場所は、足立区の登録記念物(史跡)となっており、説明板と標柱が立っています(写真・西新井一丁目二十六番地)。

■開校 新井学校は、明治五年(一八七二)に公布された学制に基づいて、明治七年一月二十二日に、如法寺(明治十三年の火災により廃寺)の敷地を借り、「第一大学区第五中学区第四番小学 新井学校」として文部省から認可され開校しました。教員は岐阜県



士族の杉野直浩(居住地不明)で二十四歳の若者でした。さらに正式教員ではないものの、藤井脩三(宮城村)と浜松県士族の斎藤秀治郎(宮城村)も新井学校で授業をしていたことが確認できます。また、吉澤嘉則(興野村)が学区取締、鈴木幹介(新井村)・小貝吉兵衛(興野村)が世話係に任命されています。※(内は公文書による)。

■教員杉野直浩 杉野直浩は履歷書によると、幕末に尾張藩校で漢学などを学んだ後、明治に入ってから数人の師に英学・洋算などを学んだといえます。そして、新井学校が認可される約一か月前の明治六年十二月二十日に新井学校の第一等授業生に任命されました。当時は、学力試験の結果に応じて、第一等から第三等までの授業生(教員)が任命されていました。こうして杉野は新井学校の教員となったの

です。

ところが、同年十月に杉野は突然栃木県へ転任しました。この点について麻生千明氏の研究に基づき、ご紹介しましょう。

杉野が転任したのは足利学校で、大教頭(現在の校長)として着任しました。足利学校は、室町時代に創建された日本最古の学校といわれる足利学校の跡地に建てられた小学校で、そのまま足利学校と称す名門でしたが、問題があったようで、教員が三人も相次いで辞めていました。

こうした状況を打開するため、足利出身の金井知義(後に東京大学予備門や日大の教授となる)が杉野を説得し、足利学校に移ることになりました。なぜ金井が杉野に目を付けたのかはわかりませんが、当時、栃木県下の教員に月給十五円以上の者は一人もいなかったところ、杉野は二十五円という破格の額を提示されたといひ、杉野が優秀な教員と知れ渡っていたのかもしれない。杉野は着任後、学校の経営を軌道に乗せ、足利の教育界で活躍したそうです。

ところで国会図書館には、『日本万国地誌略字書』という和書が収蔵されており、これは明治九年に杉野が出版したもので、日本や諸外国にある難読の地名・山川・物産などについて読み仮名をふったもので、かつて杉野が学んだ英学が活かされています。さらに

筆者は未見ですが、足利市大町の三神社の境内には「開鑿新渠之記」という記念碑があり、文章を杉野が書いているようです。

後述する新井学校の分校に勤めていた教員の履歴書を見ると、寺子屋や寺院で学んだ者が多く、第三等授業生がほとんどで、第一等授業生はいませんでした。彼らが足立区の教育史に果たした役割は多大なものがあります。一方で、これまでご紹介した杉野の高い教養は特筆されます。新井学校の生徒たちは、十か月程度の短い期間とはいえ、杉野という素晴らしい力量を有する教員の教えを受けていたのです。

■授業の内容 新井学校の生徒は六歳から十六歳までの男女五十名で、明治五年に文部省が定めた「小学教則」に則り、「習字」・「算術」・「会話読方」といった基本的なことから、「歴史論講」・「物理学論講」といった難しい内容まで学習しました。

■新井学校の閉校 明治七年六月二十九日に、新井学校の分校として興野や本木などをはじめ区内各地に計十一校の分校が誕生しました。しかし、当時、新井学校を始めとする多くの学校は、生徒からの授業料や村民の熱意などに頼って運営されていたため、分校の設立で生徒数が減少した新井学校は明治十年に経費が賄えなくなり、分校から独立した第十一番小学測江学校に吸収合併されてしまいます。その後、

地域住民から復興の願い出があり新井学校も再開校しますが、再び測江学校と合併し、さらに近松小学になり、現在は西新井小学校となっています。

新井学校跡は現在宅地や駐車場となっており、当時をしのぶものには説明板と標柱だけですが、足立区にとって重要な史跡です。

【参考文献】

麻生千明「須永平太郎の卒業(進級)証書に関する考察」(『足利工業大学研究集録』五二、二〇一七年) ※東京都公文書館に、新井学校関係の文書が保存されています。  
(文化財係学芸員 佐藤貴浩)



■皿籠 皿籠はお皿のように丸くて浅い籠です。一般的には苗籠とよばれるもので、文字通り、おもに稲の苗を天秤棒で下げて運ぶための籠で、二つ一組で使います。苗代で育てた稲苗を、田植えのために本田に運ぶときに使われます。

■田植えの時期 現在の稲苗は、ビニールハウス等のなかで機械植え用に育苗箱に糊を蒔いて育て、稚苗(ち



皿籠と天秤棒

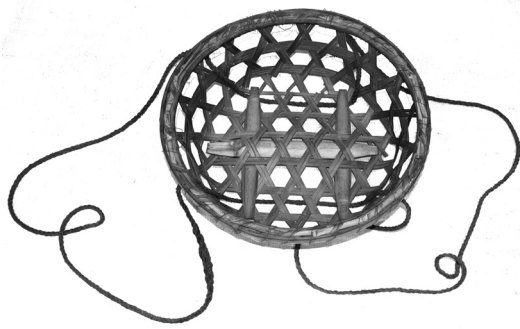
びょう)という、本葉が二、三枚出たばかりの小さな苗の状態で植えることも多いのですが、手植えの時代には成苗(せいびょう)とよばれる本葉が四枚以上伸びた種まきから三十日以上しっかりと育てた苗を植えていました。

現在、関東ではゴールデンウィークの休みのころが田植えの真っ最中で、それより早く植えている地域も多く見られます。足立区周辺は、昔から早生稲の産地で、比較的早い方ですが、手植えの時代は、五月下旬から六月上旬に田植えをするのが一般的でした。

■**苗代** 苗代は、種もみを蒔いて田植えまで育てる場所のことで、家の近くで水の掛け引きの容易な場所に作られました。

「苗半作」(なえはんさく)といわれるように、よい苗を作ることが、米づくりの成功の半分を占めるとされ、時代によって苗代の作り方にも工夫が凝らされてきました。

足立区周辺では苗代田のことをナエマとよんでいました。苗を抜きやすいように、下肥を入れて柔らかくよく耕し、ナエマのなかで、初を約一メートル幅ほどに短冊型に蒔きます。かつては稲の品種ごとに、田に広く蒔いていたのですが、稲の害虫であるニカメイガの卵や幼虫に侵された苗を発見し抜き取る作業が奨励され、作業のしやすい短冊形が推奨されました。



皿籠の底部と下げ手の棕櫚縄  
直径53cm、深さ18.5cm  
天秤棒から下げた長さ104cm

■**初蒔きと育苗** 十分に水を吸わせて、白い根を出させた初を、風の強い水の澄んでいるときを見計らって、静かに田に入り、初が落ちるのを見ながらまんべんなく蒔きます。蒔いたときには十センチほど水を保ち、根が土に着いたのを見はからって、今度は水を落として干し、芽が上に伸びるのを促します。大雨が降れば水を出し、雹(ひょう)は水を入れて防ぐなど、天候によって水を調整し、苗の育成に心を配ります。八十八夜(立春から数えて八十八日目・五月初め)には、遅霜の恐れもあるので、そんなときは霜に当たらないように水を深く入れ、朝出です。

■**田植えと皿籠** 五月も半ばが過ぎ、稲が二〇センチメートルほどに育つと、田植えの時期です。

ナエマに深く水を入れて苗を抜きやすくします。腰をかがめて両手で適量の苗をつかんで抜き、泥をよく落として稲藁でくくり、一把の束にします。その苗束を、皿籠の上にぎっしり置いて本田に運びます。

かつて、苗を抜いて束ねる細かい仕事は女性の仕事で、重い皿籠を担いで本田まで運ぶ仕事、そして植える場所と量に合わせて、苗束を二把ずつ見計らって本田に投げ入れる「苗振り」の仕事は男性の役目でした。苗振りは、その場所でどれくらい苗を使うのか、また植え手の手が届く範囲を見計らう

必要があります。うまく配分ができないと、植え手が歩いて取りに行くなど、作業に無駄があるので、田植えの効率をあげる大事な仕事でした。そして振り入れられた苗を植えるのは女性の仕事となります。

皿籠はざっくりとした六ツ目編みです。底部には、そいだ竹を並行に二本、その上に交わるように一本を編み入れ、底の強度を増しています。

固い棕櫚縄を二か所、底に通して輪にしたものを取り付け、吊り手としていますが、しっかりと底に通して重さを支えるようになっていきます。水切れがよい六ツ目編み、底にかかる重さを考えた作り、苗の丈に都合のよい深さなど、苗の運搬に適した仕様に作られていることがわかります。

■**ハス籠** 足立区周辺は、低湿地な場所を利用して、ハス田とよぶハス専門の田んぼを作り、大正期からハスの栽培と出荷をおこなっていました。

ハスの収穫時期は、最も早くは、九月の祭の御馳走に合うように掘るものですが、一般には、葉が枯れる晩冬から翌春まで、最も需要が増す正月前が最盛期になります。そのころになると、ハスの節は、四つから五つに成長し、長さは七〜八十センチメートルほどにもなります。

ハス田で掘ったハスを、自宅

まで運ぶ籠がハス籠で、長いハスを入れるのに適した長方形になっています。掘ったハスをこの籠に盛り上げるように入れ、天秤棒で運びます。

苗籠と同じように六ツ目編みで、底を支える竹が縦横に入りハスの重さを支えるようになっていきます。棕櫚縄は底部にしっかりと通し、さらに縁に一度結んであります。

この二種類の籠は、重さのある泥や水のついたものを運ぶ籠で、よく似た仕様ですが、運ぶものの形に合わせて作られているのが面白いところです。

〔参考〕『江北村と足立』矢萩三保三  
(当館学芸員 萩原ちとせ)



縦78.5×横57、深さ9(cm)、天秤棒から下げた長さ75cm  
\*長年の使用で形がゆがんでいます。